

入部谷越え

朽木と西近江路を結ぶ道

朽木地域には昔から京都と若狭地域を結ぶ若狭街道（通称・鯖街道）が通り、多くの人や物資が往来していました。

一方で、朽木と西近江路を結ぶ道もありました。市場から宮前坊を通り中山峠を越えて長尾に出る「中山道（長尾越）」と市場から野尻を通り安曇川の左岸に沿って上古賀に出る「朽木道」です。またその他に、市場から宮前坊を通り武曾に出る「入部谷越え」と村井から畑に抜ける「横谷越え」がありました。

入部谷越え

江戸時代、入部谷越えは大溝（現在の勝野）に朽木の特産品である木炭を運び出す主要な道でした。江戸時代の輸送量は明らかではあ



高島郡村絵図（一部・文化財課で加工）

りませんが、明治11（1878）年にまとめられた『滋賀県物産史』によると朽木村で生産された木炭の約34%が勝野に運ばれています。炭を運び終えた朽木の人々は、大溝で日常生活に必要な物資を調達し朽木に帰っていました。また白鬚神社のなるこ参りや獄観音の千日参りに行くにもこの道を使っていたといわれています。入部谷峠の東側の麓である武曾には、休憩場所として茶店・旅籠（宿）などが並んでいたといわれています。



入部谷峠の馬頭観音

道路の整備

そして明治15（1882）年に琵琶湖に太湖汽船が就航し、大溝港からの湖上交通（蒸気船）が利用できるようになると、朽木から入部谷を越えて、大溝港から大津・京都への行楽や修学旅行、伊勢神宮の参拝などに行く人が多くなりました。

ぶ県道朽木線が開通し、人馬での輸送から自動車への輸送に代わるきっかけとなりました。その県道の開通以降、明治から昭和初期にかけて道路や橋梁が順次整備され、朽木へのアクセスは容易になっていきました。

入部谷越えも、峠の下にトンネルが整備され道路が通ると峠道としての役割を終えることになりました。役割を終えた峠には、現在でも馬頭観音が祀られており当時の往来のようすを偲ばせます。

明治30（1897）年になると朽木市場と安曇川町田中（南市）を結

閤 文化財課

☎（25）8559

玉泉寺の石仏群

指定文化財の石仏

安曇川町田中の三田集落の一段高い位置に建つ玉泉寺の山門をくぐると、本堂に向かって右手のやや小高いところに、厚さ約50cmの花崗岩を使って丸彫りの技法で造られた石仏が並んでいます。これらは「玉泉寺石仏群」として、高島市の有形文化財に指定されています。

石仏は、いずれも結跏趺坐（左の足の甲を反対の足のものの上に交差し、足の裏が上を向くように組む座り方）した姿で、大型の5体は五智如来と呼ばれています。五智如来とは、密教の教えにある5つの知恵を象徴する如来のことです。通常は、大日、阿闍、宝生、阿弥陀、不空成就の5如来のこととされています。玉泉寺の五智如来は、向かって左から、両手を膝上で重ねているのが阿弥陀如来（像高158cm）、右手を上げて手の平を前に向け、左手を膝上に置いて薬壺を捧げているのが薬師如来（165cm）、頭上に

宝冠を頂き、膝上で左手の上に右手を重ねているのが大日如来（160cm）、右手をあげ手の平を前に向け、左手を膝前に置いて指先で地面に触れているのが弥勒仏（143cm）、そして右手を上げ手の平を前に向け、左手は手のひらを上に向けて膝の上に置いているのが釈迦如来（142cm）とされています。



玉泉寺の変遷

石仏のある玉泉寺は、遍照山の山号をもつ天台真盛宗の寺院です。境内に残る元文4年（1739）鑄造の梵鐘に刻まれた銘文によると、天平年間（729～748）に行基によって開かれ、享祿4年（1531）に火災に遭い、境内の多くの建物を失いましたが、天文2年（1533）に田中郷主・田中理春が寺の荒廃を嘆き、西教寺第四世の真観上人に願い出て復興を果たした、とされています。

一方で、本堂は慶応3年（1867）に現在の場所に移築されたもので、それ以前は、現在地の約100m北にあったと伝えられています。

境内の石造文化財

玉泉寺の境内には、先に紹介した石仏群の他に、鎌倉時代の作とされる阿弥陀如来石仏や石造宝塔、五層の塔などがある他、寺地に続く共同墓地にも三昧鳥居や六観音など多数の石造文化財が存在

します。これらからは玉泉寺の古い歴史と地域の人々の厚い信仰がうかがうことができます。



図 文化財課

☎ (25)85559

地質図からみる高島とその歴史

高島の形成

日本列島の原形は、海底で土砂や粘土、生物の死骸などが厚く堆積した層であったと考えられています。海洋プレートが大陸プレートの下に沈みこむときに、その堆積層の一部が剥ぎ取られ大陸プレートに付いたもの(付加体)が拡大・成長することで日本列島が形成されていきます。

変動・断層活動によって隆起沈降を繰り返し、山地が形成され、河川による浸食とその堆積によって平野が形成され、現在の高島の地形が作り上げられてきました。

地質の特徴とその歴史

マキノ町海津から下開田にかけて石灰岩層(青色)が点在しています。『大崎寺文書』や『下開田区有文

書』などによると江戸時代からこの地域では石灰の生産が盛んであったことが分かっています。『高島郡誌』には、この地域での石灰の生産が市域での生産の約87%を占めたことが記録されています。

比良山地や赤坂山周辺では、もろく浸食を受けやすい花崗岩が露出した風景を見ることができます。



地質図

※20万分の1日本シームレス地質図V2(産総研地質調査総合センター、URL <https://gbank.gsj.jp/geonavi/>)を使用し、市で写植加工。



白坂(音羽)



虎斑石と高島硯

鹿ヶ瀬から音羽にかけて、花崗岩のバッドランド(浸食された地形)を見ることができ、赤坂山の北には花崗岩が崩落した場所があり、「明王の禿」という名称で呼ばれています。

また安曇川町の阿弥陀山や武曾横山、蛇谷ヶ峰周辺で取れる堆積岩の一種である粘板岩(虎斑石)は、江戸時代から昭和にかけて高島硯に加工され高島の名産品として各地に出荷されていました。

このように高島では地質が深くかかわった産業、名産品があり、また風景が作り出されています。

関文化財課 ☎(25)85559

回されたお触れ書き

領地支配の確立

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いによって覇権を確立した徳川家康は、全国の支配体制の整備に取りかかり、特に江戸幕府を開いた後は、地域の特性に応じて直轄領、藩領、旗本領、役地領などを定めるようになっていきました。

近江(滋賀県)は京都や大坂の後背地として、また輸送

経路の要衝として重要視され、湖上交通の保護を始めとしたさまざまな政策がとられ、特権を与えられると共に、幕府直轄領の他に有力大名や旗本の領地の一部がおかれました。また、近江は多数の領主の領地が入り混じる地域として知られ、一村の村高を分割する相給あいぎやうの形で支配をうける村も少なくありませんでした。

高島郡膳所藩領の成立

膳所藩は、慶長6年(1601)に徳川家康が現在の天津市膳所に城を築き、譜代の戸田一西に3万石を与えて城主としたことに始まります。その後、数年間は城主の交代が続きますが、慶安4年(1651)4月に本多俊次が7万石で膳所城主になった後は、本多

氏にその所領が受け継がれていきました。

その膳所藩の領地が、高島郡の南市・下ノ城・馬場・佐賀・上寺・仁和寺・鍛冶屋・三田・沖田・産所・下古賀・庄堺・川島・三重生・十八川・永田・鴨・武曾・北畑・五十川・日爪・平井・東河原・太田・岡の一部におかれていたことが分かっていきます。また、この高島郡内の膳所藩領を統治する代官所が南市におかれていました。

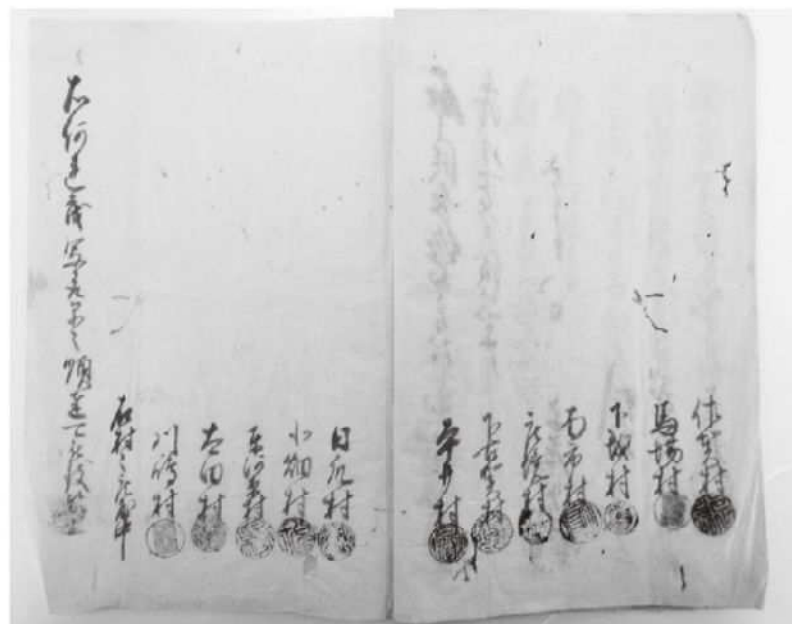
領主からのお触れ

この膳所藩のように、自分の本拠地から離れた場所に領地を有する領主も多くいたことから、領主の政策等はお触れ書きをもって支配する村々に通達されました。

膳所藩代官を務めた家に伝わった資料の中には、表紙に「御触書」と書かれた江戸時代後期の古文書があり、これには冠婚葬祭時の衣類や食べ物についての取り決め等が記されています。

お触れ書きは、一通が南市の代官所に届けられ、その後、代官から郡内の膳所藩領の村々へ順番に継ぎ送りされたようで、末尾の宛先は、膳所藩領の村々の庄屋となっています。さらに最終行には「右、何れも写し取り、早々に順達致さるべく候」と各庄屋にお触れ書きの内容を写し取って、早々に次の村に回すようにとの注意書きが記されており、当時の行政文書の伝達方法を知ることができそうです。

図文化財課 ② (25)8559



「御触書」の最終ページ

紫式部が見た「三尾が崎」

越前への旅

1月に始まるドラマの主人公として注目される紫式部は、長徳2年(996)、越前守に任じられた父・藤原為時に従い、生まれ育った京を離れて越前国(福井県)に向かいました。その旅の途中で作られた和歌の多くは、私家集である

「紫式部集」に収録されて今に伝えられており、この中には、紫式部が高島の風景を見て詠んだと考えられる次の歌が含まれています。

近江の海にて、三尾が崎といふ所に、網引くを見て
三尾の海に網引く民の手間もなく立ち居につけて都恋しも

紫式部の一行は、当時の

貴族の旅の状況等から推察すると、京の都から逢坂山を越えて大津に至り、そこからは船に乗って湖西沿岸を北上したものと考えられ



三尾が崎(明神崎)を望む



白鬚神社の境内に立つ紫式部歌碑

ます。そして高島の「三尾が崎」付近で停泊し、さらに船で塩津(長浜市)に向かい、そこからは陸路を通って敦賀に向かったと思われる。この歌は「湖岸で網を引く漁師が忙しく立ち働く姿を見るにつけても都が恋しい」という、生まれて初めて都を離れた紫式部の望郷の思いを、高島の情景とともに表した歌として知られています。

『源氏物語』の執筆

紫式部は越前に向かった2年後に父の任期終了を待たずに帰京し、藤原宣孝という同階級の貴族と結婚します。宣孝の死後、ときの最高権力者・藤原道長の娘で一条天皇の中宮であった彰子に仕えながら、有名な『源氏物語』を書きあげたことはよく知られているとおりです。

「三尾が崎」の場所

紫式部が見た「三尾が崎」は、その先端に白鬚神社が鎮座する現在の明神崎付近と考えられています。「三尾」の地名は早くから使わ

れていたようで、『万葉集』の歌に登場するほか、『延喜式』に定められる古代北陸道の駅名の一つでもあります。また『続日本紀』の藤原仲麻呂の乱(764年)に関する記述の中には「高島郡三尾崎」という地名があり、弘安3年(1280)の「比良荘絵図」には「三尾川」の上流に「三尾社」が描かれています。この「三尾川」は鴨川のことと考えられることから、「三尾」は、南は明神崎から北は現在の安曇川町三尾里周辺までの広い範囲を表す地名だったのでないかとも考えられています。

待ち望まれた湖西線

開通祝賀の催し

国鉄(現JR)湖西線は、着工から7年後の昭和49年(1974)7月20日に全線が開通し、近江今津駅で開通式が行われました。9時40分、小旗を持った今津町内の小学生約500人と小学校鼓笛隊、



建設中の湖西線(今津町住吉付近)

中学校ブラスバンドが並びプラットフォームで開通式が始まり、関係者によるテープカットが続いてくす玉が割られました。そしていよいよ9時48分、ファンファーレとろしの号砲を合図に、最初の南行きの電車が発進しました。この会場で式辞をのべた早田昌二今津町長は、翌月発行の「町報いま津」で、「夢にまで見た国鉄湖西線が誕生しました。開通式には、万感胸に迫って、祝福をする言葉に戸惑うほど感激しました。」とその喜びを表しました。

この日は、開通式の後も今津町内で終日盛大な祝賀行事が続きました。町内小学校鼓笛隊に加え、京都女子高校バトン部、淀川高校吹奏楽部、大谷高校吹奏楽部などの関西吹奏楽団約350人が駅前での演奏の後、町内をパレードし、夜には今津東小学校で演奏会が行われました。

また、前日の19日には前夜祭が行われました。会場は雨天のため予定されていた駅前広場から今津

東小学校講堂になりましたが、湖西線沿線各地の「ふるさこの踊り」と「高島音頭総踊り」が披露され、そのようすはびわ湖放送が収録をするという注目ぶりでした。

湖西線の建設工事

国鉄湖西線建設の計画が具体化したのは昭和30年(1955)頃のことでした。北陸から湖西地方を通って東海道線へつなぐバイパス路線の建設を検討していた国鉄の事情と地元の熱意によって、昭和39年6月に湖西線は工事線に決定し、沿線の状況調査が始められました。当時、湖西の地には浜大津と近江今津を結ぶ江若鉄道が走っていました。交渉の結果、江若線路の多くを国鉄が買い上げ、湖西線の用地として利用することになりました。

しかし昭和42年1月に起工式が行われ、建設工事が実際に進みだすと、用地買収問題の他、湧水の多い軟弱地形での隧道建設、大規模な橋梁建設など数々の課題が持ち上がり、難しい工事が続けられることとなりました。

開業後の賑わい

開通直後の沿線の賑わいは、たびたび新聞でも取り上げられるほどでした。7月24日の朝日新聞によると、20日から23日の近江今津駅で売れた切符は3万枚にのぼり、応援を含めた30人の駅員が業務にあたりました。また安曇川駅と近江高島駅は釣り客や水泳客らで賑わい、3日間で5千人近い人が駅を利用しました。さらにマキノ・今津地域の民宿は満員札止めで、各町の役場には宿泊場所の問い合わせが殺到している、との記事が掲載されています。

文化財課 ☎(25)8559

編集感

今回の7月号は湖西線が開通50周年を迎えるということで、表紙や特集ページをはじめ、湖西線ネタが至るところで登場します。私たちの生活を支える公共交通機関として、活躍してきた湖西線を今後も守り続けるために、この夏は湖西線に乗ってさまざまな場所にお出かけするのも良いかもしれません。そして、7月20日にはたくさんのイベントが開催予定なのでぜひ楽しんでください！(K)



広報たかしま

令和6年

7

月号
No.294発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒500-8502 滋賀県高島市新旭町北畑50番地☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
✉t-info@city.takashima.lg.jp

高島の古代遺跡その②

昭和59年(1984)、市内の永田遺跡と小荒路十寺遺跡で、県営ほ場整備(農地改良工事)に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施され、多くの埋蔵文化財資料が検出されました。

永田遺跡

永田遺跡は上永田に所在し、集落の西には式内社の長田神社が鎮座しています。北の字「城出」には「てらかやぶ」と呼ぶ長方形土塁を巡らす単郭の永田城跡があります。城主は高島七頭の永田氏です。

検出された遺構は、方形状周溝3基と井戸2基柱穴跡等で、遺物の年代は8世紀末から9世紀初頭の奈良から平安時代にかけてです。遺構内や周辺からは、木簡(うす板に墨書)・斎串(祭具)・木沓・火きり臼等が出土し、荷札木簡(現存値 長さ25cm、幅3.9cm、厚さ0.4cm)には「田廣濱 秦棕人酒公 秦廣嶋□□継」と判読できる墨書がありました。他に銅製の

帯金具の鉸具や丸鞆、巡方が出土しました。

また、和同開珎、万年通宝、神功開宝の銅銭や「媛」と「志津」と判読できる墨書土器が出土しました。遺跡の性格としては、秦氏に関する下級官僚クラスの居宅で、焼けた鉸具や木片の他、溶着した銭貨等から火災に遭ったことが想像できます。

小荒路十寺遺跡

遺跡は旧マキノ北小学校の東方水田下に広がります。発掘調査面積が小さいながら多く遺物が出土しました。9世紀初めから中頃の須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器・転用硯・木製品・万年通宝銭・隆平永宝銭などが出土しています。墨書土器は85点を数え「大家」「常大」「常大家」「常の墨書」が大半をしめ、他に「寺」「刀」「井」などがありました。この辺りは遺跡が希薄で9世紀に官制に伴う施設が突如設置されたと思像で

きます。遺跡地から北に行くと、古代三関の一つである北陸道の愛発関(敦賀市足田)推定地に至ります。

市内には、奈良時代から平安時代にかけての古代遺跡が数多く良好に残されています。皆さんも深まり行く秋の自然の中で、遺跡散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。

閤文化財課

☎ (25) 8559



永田遺跡の遠望(東北から)

編集 雑感

長い夏が終わり、ようやく涼しくなってきたと思えばもう11月ですね。今年も残り2か月、そろそろ年賀状の準備をされる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？今年は何と市制20周年記念の特別な年賀はがきが市内郵便局等で販売されます！通常の年賀はがきよりも安く、独自のお年玉くじもついていてお得になっています。詳しくは3ページをご覧ください！(S)

令和6年度地域展示「出張!!知ってる? たかしまの歴史と文化財」

- 第1回 朽木の巻 朽木公民館 開催中～3月
- 第2回 高島の巻 高島公民館 11月～3月
- 第3回 今津の巻 今津図書館 12月～1月

普段見る機会の少ない市内各地域ゆかりの文化財を展示し、分かりやすく解説します。



広報たかしま

令和6年

11

月号
No.298

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒910-1402 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp